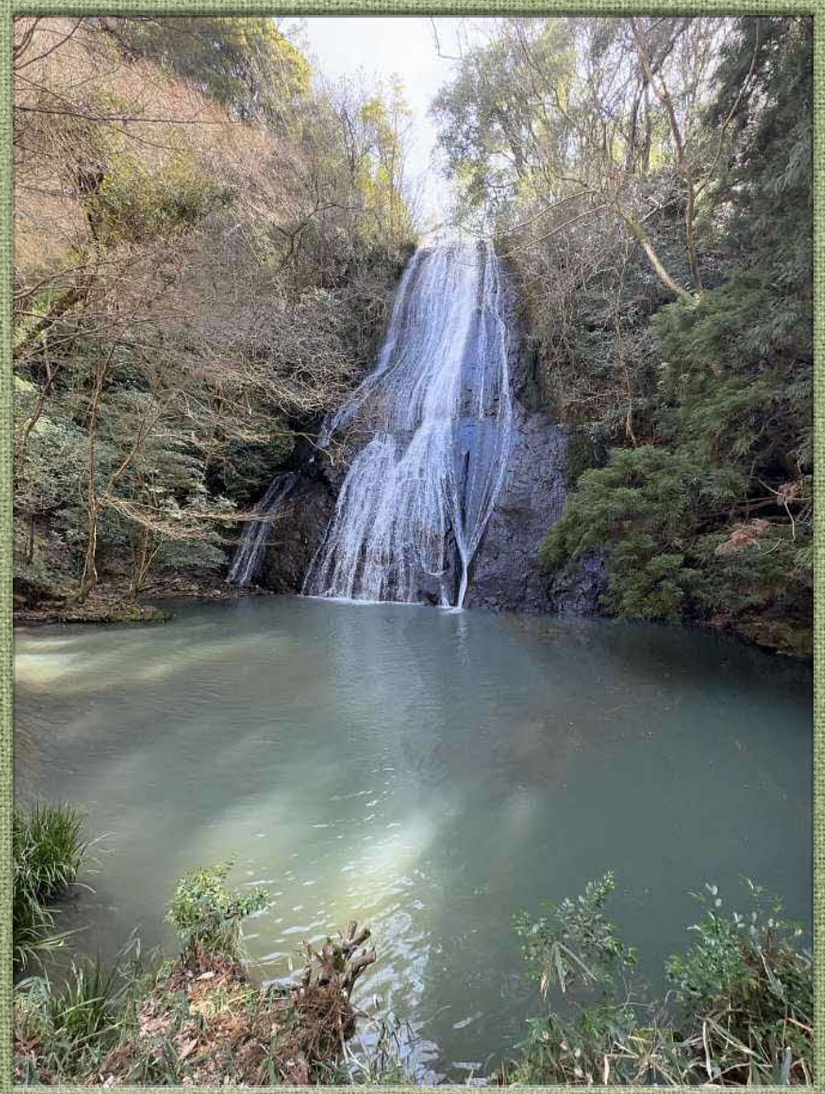
大田市ふるさと教育教材

大田～お話つむぎ

久手町編



この本の刊行にあたって

この本は、大田市教育委員会が「ふるさと教育」のための教材として制作したものです。ぜひ、様々なところで読み語りの題材や教科領域の学習教材などとして工夫しご活用ください。

この本の編集は、大田市教育委員会が委託した特定非営利活動法人石見銀山資料館が行いました。

また、昔話の選定や全体の監修については、長年大田市の市民ミュージカルなどの文化活動にご尽力いただいている脚本家の佐藤万里氏にお願いしました。

最後に、この本の刊行にあたっては次の方々にご高配を賜りました。記して厚く感謝の意を表します。

森脇太一氏ご遺族

田中為五郎氏ご遺族（ご子孫）

森井晃一氏ご遺族

この本を読む前に

この本は地元に残る昔話集をもとに編集を行ったものです。

編集にあたってはなるべく原本の内容を尊重しましたが、読者が幼児・児童である点を考慮して、漢字にはルビを付し、また難解な言葉や方言などには簡単な解説を加えました。

本文の内容を補完するため必要に応じて文末において解説を行いました。

また、この本は電子書籍です。本文中には文字横の一線、👆マーク、＊印があり、それらをクリックすると、関連するページや用語の説明、また、インターネット上のホームページや動画を見ることができます。クリックしてみてください。

👆もくじへ

もくじ

この本の刊行にあたって
この本を読む前に

もくじ

一、『きつねの嫁入り』
二、『久手のきつね』
三、『長吉さんとキツネ』
四、『掛戸の鰐走城』
五、『平家の落ち武者』
六、『掛戸のお地蔵さま』
七、『観音寺の仏像』
八、『刺鹿神社の由来』
あとがき
⭐久手町を訪ねて（久手町を紹介する動画）

一、『きつねの嫁入り』

森脇太一編『田中為五郎 昔話 集』・『久手地方の民話』より

むかしむかし、ある男が大原*から久手へ帰りがけ、きつねが綿井戸*に入っていくのを見かけたそうだ。何をしているのだろうと見ていると、きつねは青笹を頭にかぶって、きれいな嫁さんになった。それから親も出る、人足も出る、嫁入り道具の荷物も出てくる、たちまち立派な嫁入り行列ができあがった。

「こんなやつ、妙なことをするわい」

男はそう思いながら、きつねのあとを追っていった。すると嫁入り行列は迫の名田屋へやって来た。

名田屋*では嫁を迎えるというので、てんでんばたばた大さわぎしておったが、

「さあ、嫁さんが見えた」

というので、いっせいに玄関に出て迎え入れた。

「ありゃあ、嫁さんじゃない。きつねだ。どがぞ言ってきかせてあげねば」

どう言えば信じてもらえるだろうか、と名田屋の様子をのぞきこんで見ているうちに夜が明けた。

「はて、ここはどこだ」

男が辺りを見回してみると、そこは山の中の石通路＊と呼ばれる薄暗い道だった。そのわきの木のまたを名田屋だと思いこみ、頭をつっこんでおったそうだ。

注

＊　大原は久手町波根西大原のことでしょうか。【地図】👆もしかすると祖式町大原か、仁摩町宅野大原のことかもしれません。＊元に戻る

＊　綿井戸～むかしは綿を栽培していたので、綿に水をかけるための井戸がありました。その井戸を綿井戸と呼んだそうです。＊元に戻る

※綿井戸に関する記事👆

＊「名田屋」は「なだや」と読むのでしょうか。それとも「なたや」でしょうか。『久手地方の民話』には「なだや」とルビがありましたのでそうしました。

＊元に戻る

解説　石通路について

『久手地方の民話』に収録されている民話のひとつにはこのような内容が書かれています。

「むかし、久手の町はずれの迫という集落に、朝鮮からの侵入を防ぐためのとりでとなった百済山という山があった。その山の中に切りひらいてつくった道は、昼でも薄暗い細い道で、石通路と呼ばれていた」

久手町の西どなりの鳥井町には笠ヶ鼻岬があり、そこにはいまも迫という地名が残っています。「迫という集落」「迫の名田屋」の「迫」はここのことでしょうか。迫の子どもたちは久手小学校に通っています。この話は久手町と鳥井町の昔話といえるのではないでしょうか。

この近くには百済浜という海岸があり、七世紀ごろ、百済（古代朝鮮の国の名まえ）から来た人たちがここに上陸したと伝わっています。

また笠ヶ鼻岬には、鎌倉時代に元寇👆（中国王朝のひとつである元が日本に攻めてきた事件）を防ぐためにとりでが築かれ、「石弩城」（または、いしゆみしろ）と呼ばれていました。とりでがなくなったあとは、木や草が生い茂っていたそうです。

「石通路」は「「石弩城」のことかもしれません。

笠ヶ鼻岬にはいまも「石弩城」の石垣が残っていますから、山の中の石の道ということで「石通路」とも書かれたのではないでしょうか。

👆もくじへ

二、『久手のきつね』＊

森脇太一編『田中為五郎 昔話 集』・『久手地方の民話』より

むかし、喜六という人が新田にいて、久手の西田屋に奉公しておった。

そのころ、久手のあたりにはきつねがたくさんいてな、夜になると畑に出て、いもを掘って困るので、小屋掛けをして（＝小屋を作って）いも番をする者が多かった。

喜六さんも毎晩毎晩、西田屋の畑でいも番をしておった。

ある晩のことだ。喜六さんがいつものようにいも番に出ていると、ひょいときつねが姿を見せた。

「こいつ、出たな」

喜六さんは持っていた鎌を、きつねめがけてぶっつけた。鎌は当たらなかったが、きつねはびっくりして逃げていった。

それから三日目の晩、喜六さんがまたいもの番をしていると、きつねが喜六さんの友達に化けてやって来た。

「なんと喜六さん、今晩は観音＊さんの庭で踊りの最中だよ。わしもいま踊ってきたところだが、おまえの姿が見えないので迎えに来たんだ」

「そりゃあ行ってみたいが、いもの番をしないとなあ」

「なあに、西田屋の親方が見ているじゃなし、ちょっとぐらい踊りに行ってもわかりゃあしないさ」

「なるほど、そうだ。おまえさんの言う通り、親方が見てはいないのだから、これから行って踊ってこようか」

喜六さんが友達についていくと、観音さまの庭では賑やかにみんなが踊っている。喜六さんもさっそく輪に入ってひと回り踊ったが、それから先は何もわからなくなってしまった。

一方、西田屋では、朝になっても喜六さんが畑から帰ってこないので大さわぎになった。村人たちが総出で、

「喜六を出せ、喜六を返せ」

と鉦を叩いて探し回ったが、どこにもいない。

四日目の朝になって、ようやく喜六さんが実家の納屋の前にぼんやり立っているのが見つかった。そのときの喜六さんの姿ときたら、体中すり傷だらけ、髪もぼさぼさになっていた。

「こいつはきっと、きつねが三日三晩、山の中を連れ歩いたに違いない」

と村の人たちは噂しあった。

これはわしが子どものときの話でな、喜六さんは近頃まで生きておられた。＊

注

＊　話者の田中為五郎さんは慶応元年（1865年）生まれなので、江戸時代終わりか、明治のはじめのころのお話と思われます。＊元に戻る

＊「観音さま」は久手町波根西にある観音寺のことかもしれません。＊元に戻る

＊この話が採集されたのは昭和15年（1940年）ごろなので、喜六さんは九十歳くらいまでお元気だったのでしょうか。＊元に戻る

👆もくじ

三、『長吉さんとキツネ』

大田高校民話クラブ編『民話』・『久手地方の民話』
『長吉さんとキツネ』より

むかし、久手町の西のほうに、となりあった小さな村があったそうだ。ひとつを西村、もうひとつを鈴見村*といってな、どちらの村にも長吉というおじいさんが住んでおった。

西村の長吉さんは見るからに強そうな木こりでな、毎日朝早くから山へ行って、木をきって暮らしていた。

鈴見村の長吉さんは鉄砲撃ちだ。なかなかの腕まえで、ここらへんの人で鉄砲撃ちの長吉の名を知らない者はいなかった。

ふたりの長吉さんは山ではたらく仲間だし、名まえも同じ、たいそう仲良くしておった。

冬のある日のことだ。

病気で寝ていたおばあさんが、

「おいしい魚が食べたいなあ」

と言うのでな、西村の長吉さんは海辺の柳瀬村へ魚を買いに出かけていった。

けれども雪の降る寒い日だったので、どの魚屋さんにも魚はない。それでも長吉さんはおばあさんの喜ぶ顔が見たくて、いっしょうけんめいさがして歩いた。

ありました。とうとう魚がありました。

長吉さんは早くおばあさんに食べさせてあげようと、持っていたおむすびを食べもせず、ふところに入れたまま帰っていった。

てくてく、てくてく。さくさく、さくさく。

冬は日が暮れるのが早い。雪の積もった一本道を村に向かって歩くうち、あたりが暗くなってきた。

てくてく、てくてく。さくさく、さくさく。

長吉さんはふと、うしろからだれかがやってるのに気がついた。一本道だから行き先は同じ西村か、そのとなりの鈴見村だ。長吉さんはいっしょに帰ろうと思ってゆっくり歩いてみたのだが、ふたり

の距離はいっこうにちぢまらない。おかしく思って立ち止まってみると、近づいてきたのは若い男の人だった。

「はて、見かけない顔だが、どこへ行きなさる」

長吉さんはたずねたが、若い男はうつむいて答えない。

「鈴見村かね、西村かね」

かさねて聞くと、男はようやく顔を上げて、

「じつは、わたしはキツネなのです」

と言う。肝の太い長吉さんはおどろきもせず、またたずねた。

「ほほう、キツネか。そんな人間のなりをして、いったいどこへ」

「鈴見村の長吉さんのところへ行こうと思うのです」

とキツネは答えた。

「長吉ならわしの友だちだが、なにか用があるのかね」

「はい。わたしの女房は長吉さんの鉄砲に撃たれてしまいました。長吉さんの家に皮がかざってあるというので、ひとめ見たいと思いまして」

「それはかわいそうなことをした。長吉さんもかわいそうに思って見せてくれることだろう。さあ、早く行きなされ。さあ早く」

けれどもいくらすすめても、キツネはちっとも動かない。

「ははあ、このキツネ、本当はわしのおむすびがほしいのだな」

そう気づくと、長吉さんはふところからおむすびを取り出して、むしゃむしゃと食べはじめた。

それを見たキツネは、残念そうに山へ帰っていったということだ。

注

＊　昔話集のなかには「鈴見村」と書かれたものと「涼見村」と書かれた

ものがあります。どちらも「すずみむら」ですが、字が違います。

久手町には鈴見自治会と涼見自治会があり、ふたつの自治会はとなりあっています。町では鈴見を「かねすずみ」。涼見を「りょうすずみ」と呼んで区別しているそうです。

鈴見はむかしの波根西村、涼見は刺鹿村でした。久手町は昭和12年（1937年）にこのふたつの村が合併した町です。

この昔話の「すずみ村」はどちらの村だったのでしょうか。昔話は口から口へと伝えられてきたので、はっきりとわかりません。

むかし久手町には海水が侵入してできた「波根湖」と呼ばれる小さな湖入り江がありました。「鈴見（涼見）」の語源は「静海」（しずみ、でしょうか？）だと言われています。

西村は鈴見のとなりの大西のあたりだったようです。＊元に戻る

👆もくじへ

四、『掛戸の鰐走城』

大田高校民話クラブ編『民話』・『久手地方の民話』より

久手町の絶景のひとつである掛戸の地。

そのむかし、戦乱の続く戦国の世には、掛戸*の東に鰐走城*という城があった。

この城の天守閣にはたいそう音色の良い鐘が吊るされていたそうだ。明六つ*、暮六つを知らせる鐘の音は、東は松江藩、西は浜田藩まで聞こえたと言われている。まだ波根湖*のあった城下に美しい鐘の音が鳴り渡る、それはどんなに風情ある光景だったろうか。

そのころ石見銀山のある大森には、山の奥深くに盗賊たちが住んでいた。盗賊たちはこの鐘を盗んでやろうと思い立つと、船で波根湖へやって来て、盗み出した鐘を積んで逃げ去ろうとした。

ところがどうしたことだろう。とつぜんものすごい風が吹き荒れた。船が揺れ、鐘は湖に転がり落ちてしまったが、拾い上げることもできない。

盗賊たちが命からがら去っていくと、風はぴたりとおさまったそうだ。

そのあくる日から、夜になると不思議な音が聞こえるようになった。湖の底から聞こえるその音は、毎晩どんどん大きくなっていく。じっと耳をすましてみると、鰐走城の鐘の音のようだった。

「鐘がお城に戻りたがってるんじゃないか」

「でもどうやって引き上げたらいいのかなあ」

村人たちが途方に暮れている（どうしたらいいかわからず、困りきってしまうこと）と、旅の行者（仏教の修行をしている人）が通りかかった。村人たちから相談を受けた行者はしばらく念仏を唱えると、こう答えた。

「湖の主は、若い娘をいけにえにさし出せば、鐘を返してやろうと言っている」

村人たちはまた途方に暮れてしまった。一体だれをさし出せばいいのだろう？

そこへひとりの娘がやって来た。

「わたしには父も母もいません。お城の鐘が戻ってくるなら、わたしがいけにえとなりましょう」

お清は気の優しい娘で、村の人たちが困っていることを知ってそう申し出たのだ。

ほかに方法はない。村人たちはお清を湖のほとりへ連れていくと、八枚もかさねた座布団にのせて帰っていった。

「どうか、お城の鐘を返してください。またきれいな音色を聞かせてください」

お清はじっと祈り続けた。

すると丑三つ時（真夜中のこと）のころ。

薄明かりが射したかと思うと、湖がまっぷたつに割れていった。

「あ、あそこにお城の鐘が」

お清は駆け寄ろうとしたが、たちまち濃い霧がたちこめた。どこからともなく水の精たちが現れて、舞いながらお清を絹糸でからめとっていく。

「鐘などあきらめて、帰っておしまい」

絹糸はきつく体をしばりあげたが、お清はくじけなかった。

「わたしはどうなってもかまいませんから、どうか鐘を返してください」

お清は必死でくり返し、やがて気が遠くなっていった。

ふと気がつくと、あたりは薄明るくなっていた。心配そうにお清をとりかこんでいる村人たちの顔が見える。

「鐘はどうなりましたか」

お清がまっさきにたずねると、村人たちはにっこり笑って指さした。

鰐走城の天守閣に鐘が吊るされ、明六つを知らせる音が鳴りはじめた。

「お清、おまえのおかげだよ。ありがとう」

「おまえが無事で本当に良かった」

お清も鐘も無事に戻り、村人たちは心の底から喜んだ。

こうして鰐走城の鐘はまた美しい音色を響かせるようになったそうだ。いまもきっとどこかで鳴り響いているに違いない。

注

＊　掛戸松島は奇岩と絶壁で知られる景勝地（景色のきれいなところ）です。

波根西海岸からは岩の頂上に一本の松が立っている松島や、日本遺産👆の構成文化財でもある立神岩を見ることができます。

『杜子春』や『蜘蛛の糸』を書いた小説家の芥川龍之介👆も友人とここを訪れたことがあるそうです。海水浴を楽しみ、「うつくしいね！」「ここに来てよかった」と言い合いながら海にしずむ夕日をながめ、翌朝には「鰐走りまで散歩した」と友人は旅の思い出を書いています。＊元に戻る

＊

戦国時代、石見銀山をめぐる毛利元就と尼子晴久の戦いがくり広げられていました。このとき尼子軍の東側のとりでだったのが掛戸の鰐走城👆と刺鹿の岩山城でした。＊

元に戻る

＊

明六つ、暮六つ～日の出前の夜が明けだしたころを明六つ、日の入り後の空が暮れるころを暮六つといいます。その間を六等分して、むかしは時刻を決めていました。明るくなったら起き、暗くなったら寝る、という生活にあわせたものです。これは江戸時代に用いられた時間の呼び方で、それ以前は十二支を用いていました。日の出のころは卯の刻、日の入りのころは酉の刻になります。このお話は最初に「戦国の世」とありますが、そのころはまだ十二支を用いて時刻をあらわしていました。語り継がれていくなかで、

岩山城跡の遠景

当時の人たちにとってわかりやすい時刻の呼び方に変化していったのかもしれません。。*元に戻る

＊　むかし久手町波根西には「波根湖」👆と呼ばれる小さな湖がありました。海水が浸水してできたもので、たびたび氾濫して、住民たちは困っていました。

そこで鎌倉時代の徳治元年（一三〇六年）、地元の有力者だった有馬家の当主たちが七年あまりの歳月をかけて、湖の水が海へ流れ出るようにしたそうです。

海と湖がつながっていたので、盗賊たちは船で盗みに行ったのでしょう。

その後、江戸時代や昭和二十一年以降に干拓工事が行なわれ、波根湖はなくなり、新田開発が進みました。。*元に戻る

１９１５年（大正４）頃の波根湖
出典：『安濃郡誌』国立国会図書館デジタルコレクション

👆もくじへ

五、『平家の落ち武者』

大田高校民話クラブ編『民話』より

久手町には清滝＊という、町の名所と呼ばれるところがある。

いまから六百年以上もむかしのことだ。源平の合戦＊ののち、平家の落ち武者（戦いに負けて逃げていく武士のこと）のひとりがかわいそうに、この清滝の滝つぼに落ちて死んでしまったそうだ。逃げる途中で足をすべらせて落ちたのだろうか。それとも追手に斬られて落ちたのだろうか。

それからというもの、この落ち武者が滝つぼに落ちた日が来ると、身につけていたよろいかぶとが滝の近くの岩に干してあるようになったという。そしてその日が過ぎると、よろいかぶとはいつともなく消えてしまっているそうだ。

注

＊　清滝は久手町刺鹿の景勝地（景色のきれいなところ）です。横に三つ連なっためずらしい形の小さな滝や、二十メートルもの高さのある大きな滝があります。平家の落ち武者が亡くなったのは大きな滝だったのでしょうか。

新緑の季節も紅葉の季節も美しい景色が楽しめますが、道が良くないので気をつけて出かけてください。。＊元に戻る

＊　源平の合戦は鎌倉時代の前、一一八〇年から一一八五年の源氏と平氏の戦いですから、六百年どころか、八百年以上もむかしのことになります。ここでは原文通り「六百年以上」としておきました。。＊元に戻る

👆もくじへ

六、『掛戸のお地蔵さま』

大田高校民話クラブ編『民話』より

👆もくじへ

明治の終わりのころだそうだ。

コロリ（コレラのこと）といって、コロコロと人が死んでしまうような悪い病（病気のこと）がはやってしまった。

柳瀬村の人たちは「これは大変だ」と大あわてした。なんとかコロリを入れまいとして、村の入り口にあたる掛戸に一体のお地蔵さまをまつったそうだ。

「どうか、この村にコロリが入ってきませんように」

柳瀬村の人たちは一心にお地蔵さまにお願いし、そのかいがあって、村ではコロリははやらなかった。

「ああ、ありがたい。お地蔵さまのおかげだ」

村人たちは喜んで、それから毎年八月五日に縁日を開くことになったそうだ。

このお地蔵さまは、いまでは交通安全の守り本尊になっている。

七、『観音寺の仏像』

大田高校民話クラブ編『民話』より

遠いむかし、嘉吉＊という年号の甲子＊の春のことだ。

ひとりの漁師が観音さまの夢をみた。

「われ、遠く百済よりこの地に渡って、海中の藻とともに歳月を経ること久しい。願わくは、われを陸にあげてもろびとに結縁せしめよ。われ、この地の衆生と深き因縁あり。怪しむことなかれ」

（わたしは遠く百済（古代朝鮮の国の名まえ）からここにやって来たが、海の中にしずんでしまい、藻におおわれて長い年月が経ってしまった。できることなら、わたしを海の中から拾い上げ、たくさんの人がお詣りできるようにしてほしい。わたしはこの地の人々と深い縁がある。怪しまないでほしい）

夢からさめて海のほうを見てみると、不思議な光が射していた。

漁師は仲間たちと舟を出し、その場所にもぐり、藻におおわれた仏像を見つけ出した。それ以来、その浜を百済浜＊と呼ぶようになったという。

村人たちはその仏像のために小さなお堂＊を建てたそうだ。仏像は台座が三重になっていて、木製の観音さまの中に金属製のご本尊（本堂の中央に安置される像）が入っていた。観音さまには藻が生えていたそうだが、いまはもう残っていない。

注

＊　嘉吉は室町時代、一四四一年から一四四四年に用いられた元号です。＊

元に戻

＊　甲子は干支の第一番目にあたる年です。いまよく知られているのは十二支ですが、むかしは十干と呼ばれる十の文字と十二支を組み合わせて年月日をあらわしていました。＊

元に戻る

※昔の暦に関する詳しい情報👆

＊百済浜は鳥井町笠ヶ鼻岬の東側の海岸で、すぐとなりが久手町です。七世紀ごろ、この浜に百済の人が上陸して住みついたと言われています。

＊元に戻る

＊久手町波根西の観音寺は嘉吉のころに建てられたと伝わっており、百済浜の海底から見つかったという観音像があります。。＊元に戻る

👆もくじへ

八、『刺鹿神社の由来』*

大田高校民話クラブ編『民話』より

いまから七百年ほどむかしの元暦二年*、源氏と平氏が争っていた世のことだ。

甲斐の国（いまの山梨県）の山内豊後守という人が、八幡宮の軍神、八幡大神をお連れすることになった。

家来の渡邊、平井、川上、安藤*をともなって、石見の国の刺鹿村までやって来た豊後守は、長旅で疲れていたので、大きな松の木の根元でひと休みした。

夕暮れになり、さあ出発しようとしたときのことだ。

大神の入っておられる櫃（貴いものを入れる木の箱のこと）を背負おうとしたのだが、ずっしりと重くなっていて、どうしても立ち上がることができない。おどろいた豊後守は大神のまえにひれ伏して、

「櫃が重くて立ち上がることができません。いかがいたしましょう」

とおたずねした。すると、

「わたしはこの地にとどまることにしたから、おぬしたちもここに住むがいい」

と神命がくだったという。

注

＊　久手町刺鹿の刺神社は赤い鳥居が美しく、桜の名所としても知られています。＊元に戻る

＊　元暦二年は一一八五年、壇ノ浦の戦いで源氏が平氏に勝利した年です。源平の合戦に勝利しようと、山内豊後守は八幡大神をお連れしようとしたのでしょうか。

いまから八百年ちょっと前のことになりますが、原文通り「七百年ほど

むかし」としておきました。*元に戻る

*　久手町には渡邊、平井、川上、安藤という名字の人が多くおられます。甲斐の国から来た人々の子孫かもしれないと考えると、昔話が身近に感じられますね。*元に戻る

👆もくじへ

あとがき

佐藤　万里

『田中為五郎 昔話 集』『民話』『久手地方の民話』の三冊から、島根県大田市久手町に伝わる昔話（民話）をとりまとめた。

この三冊はいずれも手書きの昔話（民話）集で、久手町郷土史家の森井晃一氏が所持しておられた。森井氏は久手公民館で長く主事を務められ、大田市文化協会の会報「きれんげ」の編集にも三十六年にわたって携わってこられた。「ふるさと紀行」という会を設け、郷土史を熱心に調べておられたので、その活動のなかでこれらの昔話集も入手したのではないだろうか。

森井氏のご尽力がなければ失われてしまった昔話集もあったに違いない。深くお礼を申し上げたい。

『田中為五郎 昔話 集』は郷土文化研究家として名高い江津市跡市の森脇太一氏が編集されたものである。昭和十五年、森脇氏は鳥井村（当時）に足しげく通って昔話を採集された。

なかでも鳥井村新田にお住まいで、慶応元年（1865年）生まれの田中為五郎さんは数多くの昔話を知っておられた。田中氏の語った二十二の昔話をまとめたものが『田中為五郎 昔話 集』で、昭和四十八年に発行された。森脇氏は「はじめに」で「同好のかたがたや遺族関係者に配ることにした」と書いておられる。

『民話』は大田市各地の民話や言い伝えを広く集めたもので、四十四編が収録されている。表紙に「編集・大田高校民話クラブ」と記されているが、いつ頃活動したクラブなのか、誰が関わっておられたのか、どのように昔話を集めたのか、詳細は不明である。収録されている話のなかに「つい二、三年前、国道の工事現場で国分寺跡が発見された」という記述がある。9号線バイパス工事の際、天王平廃寺が見つかったのが1969年なので、1970年代前半に昔話が採集されたのではないかと考えられる。

『久手地方の民話』は詳細がまったく不明である。同一の筆跡なので、集められた昔話集のなかから久手地方にまつわる七編を

森井晃一氏がまとめられたのではないかとも推測されるが、出典がよくわからないものもある。

大田高校民話クラブの活動や『久手地方の民話』について、なにかご存じの方がおられたらぜひお知らせいただきたい。

👆もくじへ

久手町(くてちょう)を訪(たず)ねて

👆久手町紹介動画

👆もくじへ

大田市ふるさと教育教材

大田～お話つむぎ・久手町編

令和五年三月三十一日

監修　佐藤　万里

編集　特定非営利活動法人石見銀山資料館

発行　大田市教育委員会

〒六九四－〇〇六四　島根県大田市大田町大田ロ一一一一番地

電話　〇八五四－八二－一六〇〇